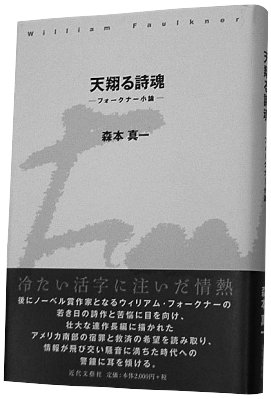
新刊紹介

森本真一著
『天翔る詩魂 ―フォークナー小論―』

近藤圭一

ウィリアム・フォークナーとは誠に不思議な作家です。現在ではノーベル文学賞まで受賞した二十世紀米文学の大作家として知られていますが、ノーベル文学賞を受けた一九五〇年の段階ですら故国においては批判的な評価を受けることが多かったと伝えられています。彼は糊口を凌ぐためにハリウッドで映画のシナリオを書いていたほどでした。米国においてフォークナーの作品が正当に認められるようになったのは、批評家であるマルカム・カウリーが編纂した『ポータブル・フォークナー』が一九四六年に出版されてからで、絶版となっていた彼の作品がそれ以来漸く復刊され始めましたが、それが国際的評価につながったわけではありません。彼が小説を書き始めた初期の一九三〇年代の初めに、この米国ではあまり振り向かれなかった作家がいち早くフランスに紹介され、故国での不人気とは裏腹に大変歓迎されました。何冊もの訳書が出版され、サルトルやマルロー、後にはカミュといった人たちがその文学的豊饒さについて言及しました。ヨクナパトーファ郡ジェファーソンというローカルな田舎町を舞台にする作品群が、そこからずっと離れた旧大陸で評価され、グローバルな価値を見出され、二十年近くの間愛読されてきたのです。それが本国に還流したような形になるのですが、この一事から見てもこの作家がいかに不思議な存在であるかわかります。



2015年1月20日発行
近代文藝社
四六判　280頁
定価　本体2000円＋税

米文学に味くフォークナーについて知るところが尠ない私が学兄森本真一先生の好著『天翔る詩魂 ―フォークナー小論―』を紹介することになったのも、偏に作家のローカルにしてグローバルな不思議な縁によります。私は近代日本文学の研究に従っており、特に福永武彦に興味を持って色々調べておりますが、この福永が既に一九三〇年代の後半、東京帝国大学の仏文科の学生であった頃にフォークナーに出会っています。それは『n.r.f.』（新仏蘭西評論誌）に紹介されていた仏訳本とそこに掲載されたサルトルの論文でした。彼は『サートリス』の原書を読もうとするほどに興味を持ちますが、その関心は亡くなる半年前までフォークナーに言及するくらいに長く続き、作品の上でも大きな影響を受けていると認めています。本国でさっぱり売れない作家がフランス経由で日本にまでもたらされたというのもフォークナーの不思議さを説明するものでしょう。

著者はこのような不思議な作家を卒業論文で取り扱ってから四十年以上というもの、ずっと追い続けています。無論、大部で難解な何冊もの長篇小説を生み出したフォークナーの世界を究明しようとすれば、万巻の書を著しても足りません。著者はこの比較的小振りな書でその魂をつかむべく、達意の比較文学的研究法を用いています。著者は長年日本比較文学会で活躍し、何編もの論文をものしています。そして、特にフォークナーのように違った大陸でいち早く見出されたような作家には、このような比較文学的研究法は大変有効な研究法として機能しています。

しかし、老練な著者はいきなり奥の手は出しません。比較文学は米文学と日本文学、或いは文学と音楽といったような異なった文学やジャンルとの比較を通して文化文学の本質に迫ろうとするものですが、ともすれば表面の類似性だけをなぞるだけの安直で皮相的な結果に終わる虞があります。著者はその愚を避け、手堅くその基礎を固めています。「黒い苦痛の家に住む詩人」と題されてい

る開巻第一章はさながら伝記の第一章のようなもので、彼が少年時代に西欧古典からジョイス、パウンド、バルザック、フローベール、シェークスピア、象徴主義の詩人たち、トルストイ、ドストエフスキーなどといった欧州文学に親炙し、長じて「詩的な夢想家」となり、さらにシャーウッド・アンダーソンとの出会いをきっかけとして小説家に脱皮していく様子が描かれています。この作家が上述の不思議な受容のされ方をしたことはその出発の段階から予定されていたのでしょう。そして、ここに詳述されている初期の詩編たる『五月祭』『大理石のファウヌス』はこれを実証するものです。著者は既に十八年前に『アンダーソンとフォークナー』を上梓していますが、今になってみればこの第一章の準備作業のように思われます。

第二章以降は比較文学的研究の本領が存分に発揮せられています。フォークナーを軸にその前後に何人もの作家を配置して、その本質を浮かび上がらせようとしています。例えば、第二章「倒錯と複眼」では、フォークナーの『蚊』と『サートリス』、『八月の光』、『寓話』に光を当てて、彼に大きな影響を与えたオスカー・ワイルドと比較し、フォークナーと同じようにその影響下にあった芥川龍之介の作品を分析して、そのキリストに対する理解を導き出し、それらを補助線として対比させた上でフォークナーを「宗教的芸術家」と定義づけました。続く第三章「命の印字」では、『八月の光』からギリシャ的要素を抽出し、三島由紀夫の発言を援用してスポーツに話題を進め、田中英光の『オリンポスの果実』や虫明亜呂無の『ペケレットの夏』などと比較してスポーツマンの「道」を説き、その上でフォークナーの『熊』を論じ、「躍動する生命への敬意がこの作家を虚構の創造に駆り立てていた」と結論します。

以下、第四章「罪のバイブルから『敗れざる者』へ」、第五章「雄飛する想像力」、第六章「やさしげで穏やかな人」、第七章「世界の喧騒を凌ぐ声」と続きますが、最終章の第八章「欠けている何かを」について少し触れてみます。ここでは記述のほとんどがフォークナーと村上春樹の比較に割かれていますが、まず『野生の棕櫚』を取り上げて、「野生の棕櫚」「オールド・マン」という二つのストーリーが交互に現れて展開していくという構成は村上の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の外観とてもよく似ていると述べます。外観だけではなく、例えば村上の『納屋を焼く』の主人公はフォークナーを読んでいることになっていますし（村上はフォークナーの『納屋は燃える』という短篇のことを全く知らないと明言していますが、恐らくは韜晦でしょう）、『ダンス・ダンス・ダンス』の「僕」も『響きと怒り』を読んでいるといった風に設定の中にフォークナーがあちこちに出てきます。村上がフィッツジェラルドに大きな関心を寄せていることはよく知られていますが、フォークナーもいくつか愛読しているのだろうと著者は推測しています。そして、作品の内面のレベルで比較すると、「悲嘆と無のうちで私は悲嘆を選ぼう」と『野生の棕櫚』で語り、「無」の対極、「強固な意志の表明と意志の主体としての自我の確認」を作品の中に盛り込んでいるフォークナーは、「あらゆる人間は自分自身ではなくその人物の過去の総計」という立場を表明しますが、それは村上が「アイデンティティー」、即ち「心」を「一人ひとりの人間の過去の体験の記憶の集積によってもたらされた思考システムの独自性」と定義することに極めて近いと指摘しています。上に述べた作品の他にも『1Q84』や『羊をめぐる冒険』、さらには『やがて哀しき外国語』なども俎上に載せて、村上を語ることでその影響の根源たるフォークナーの本質に迫ろうという論法は比較文学者としての著者の面目躍如たるものがあります。

本書は著者の長年の求道の精髄であり、日本のフォークナー研究に一石を投ずる好著です。なお、巻末の註に掲げられている書物の一覧は著者の研究の蓄積の総和で、フォークナーを研究するためには何を繙けばよいかの好個の手引き、ここだけ取り出しても資料的価値があります。

（こんどう　けいいち　聖徳大学准教授）